

十段物語



第15回

戦後柔道の発展を牽引 醍醐敏郎十段

本橋 端奈子

柔道への目覚め

醍醐敏郎は大正15（1926）年

1月2日、千葉県安房郡船形町仲宿^{ふなかたまち}

¹に、醍醐武兵衛の四男として生まれた²。醍醐の先祖は、江戸初期より捕鯨業を創始した家系である。初代醍醐新兵衛は、捕鯨の功績から千葉県の七聖人に列せられるほどの家柄であった³。父武兵衛は米穀や酒類等を販売する商店を営んでいた。

船形尋常高等小学校を卒業後の昭和13（1938）年、千葉県立安房中学校に入学した醍醐は、必修科目で柔道を選択したものの、部活動では水泳部へ入った。しかし、しばらくして中耳炎を患い、水泳は断念せざるを得なくなった。そこで、その身長179cm体重85kgという当時の中学生としては並はずれた大きな体格を買われ、また周囲から請われて柔道部へ入ることとなる。これが醍醐と、生涯の仕事となる柔道との出会いで

あった。そして、柔道部師範の高木一八段⁴から手ほどきを受け、柔道の面白さにのめり込んでいく。

昭和15（1940）年2月には正式に講道館に入門、14歳で初段に合格したが年次が足りないことで昇段は保留となり、明けて昭和16（1941）年1月12日、晴れて黒帯を許された。また、千葉県下中等学校柔道大会では八将として出場し、全勝して母校を優勝に導くなど、早くも将来を期待される選手となりつつあった⁵。

また、当時の柔道部は、相撲の試合にも助っ人として駆り出されることがあった。醍醐も例に洩れず、千葉県大会に出場し団体で優勝、個人戦では2位となり、県代表として全国中等学校相撲大会に出場している。この大会での1回戦、無名の安房中学は前年度優勝の高知農業と対戦し、見事打ち破ってリーグ戦を勝



千葉県での相撲大会で優勝を果す

ち抜き、上位16校に進出を果すも、青森県の三本木農業の前に敗退した。醍醐は、団体リーグ4戦を全勝したことで個人戦の出場権を得る。そして個人三回戦、米沢興譲館中学の選手と対戦したが、上位進出はならなかった⁷。醍醐の後のライバルとなる吉松義彦は、2年前にこの大会で個人優勝を果し、中学生横綱となっている。

この活躍が角界立浪一門の眼に留まり、「ぜひ醍醐を相撲取りに」と自宅や学校にまで勧誘に来る騒ぎになった⁸。醍醐を力士とするための後援会ができ、既に房州灘という四股名まで用意されていたという。

その後、16歳の若さで昭和17(1942)年2月25日には二段、約半年後の9月2日は三段と、醍醐は稀に見る速さで昇段している。この頃には、醍醐の中に柔道をもっと専門的に学びたいという気持ちが目覚め始め、東京高等師範学校体育科二部⁹への進学を決意する。

戦時下・戦後の混乱期の学校生活

その当時高等師範学校では、永岡秀一をはじめ、橋本正次郎、大滝忠夫など錚々たる顔ぶれが指導をしていた。そして醍醐は、この先達たちから、嘉納師範が創始した講道館柔道の真髄を徹底的に教育される¹⁰。この高等師範での柔道修行が、醍醐の柔道哲学の根幹をなしていると言えるであろう。

当時は既に戦時下でもあり食糧事情は悪く、稽古や授業も儘ならない生活だったが、醍醐は高師の教授や先輩に揉まれてめきめきと実力をつけていった。昭和18(1943)年5月の講道館春季紅白試合参段の部において、醍醐は12人抜きの快挙を遂げ、見事四段へ抜群昇段を果した。旭日の勢いで活躍を続ける醍醐だったが、時局の逼迫には抗えず段々と学校での授業は行われなくなり、勤労奉仕へと駆り出されるようになっていく。はじめ、東京市内の工場

で軍需物資の生産に携わっていたが、昭和19年9月、高師の柔道専攻・剣道専攻の1、2年生80名は、静岡県庵原郡蒲原町^{いばはら}にある日本軽金属蒲原工場へ、長期の勤労奉仕に派遣されることになった。この工場で醍醐は、軍の戦闘機や爆撃機の機体を作るための高純度のアルミニウム生産に従事した。アルミナという原料を電解炉にかけて純度99パーセントのアルミニウムを生成するのである。業務は8時間労働3交代で徹夜の作業となり、大変な重労働であったという。

この工場には武道場があり、ここでも醍醐は柔道の稽古をやめることは無かった。厳しい交通事情で、静岡から東京に行くのは大変困難だったが、醍醐は昭和19（1944）年10月の講道館秋季紅白試合に四段の部赤組の大将として出場している。そして見事5人抜き、6人目の大将

戦を引き分けて、またしても抜群で早くも18歳で五段を許された¹²。

昭和20（1945）年2月、醍醐は徴兵検査で甲種合格となり、7月には現役招集されて佐倉にある陸軍333連隊に陸軍二等兵として入隊することとなった。1週間ほどして、郷里の館山市近郊の海軍砲術学校内にある陸軍兵舎に移動となり、アメリカ軍の襲来に備えるなどしている。入隊1ヵ月余で終戦となり復員し、母校に復学したものの、懐かしい校舎は見る影もなく焼け爛れ、残骸だけが取り残される寂しい姿となっていた。柔道剣道は軍国主義の象徴的なものとして禁止され、「体育専攻」として統一された中での授業再開となった。

柔道の稽古は、半分焼け残った講道館で細々と行うような有様だったが、劣悪な環境でありながらも、醍醐は、柔道の稽古にはあらゆる手段

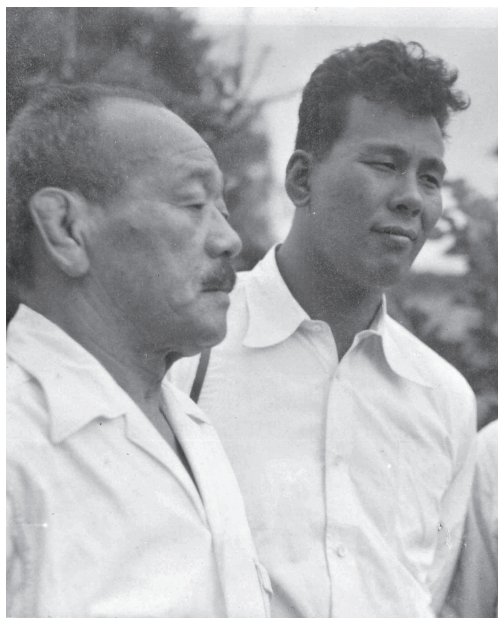
を尽して励んだ。

戦中・戦後の混乱した時代にあり、充分な柔道の稽古・勉強ができず、空白の期間だったが、醍醐なりに懸命に柔道に生きた時代だった。

講道館研修員として

昭和22（1947）年3月、高等師範学校を卒業した醍醐は、1年ほど三重県立宇治山田商業学校に体育教師として赴任することになった。

ここでは、学校の授業以外にも町の有志らと集まって稽古をしたり、土日には近鉄で京都の武徳殿や大阪のニュージャパン柔道協会に出かけては稽古を願ったりと、柔道を続けている。この頃、福岡で開催された九州対全関西で争う新生柔道大会に選考され、出場を果している¹³。この大会個人一回戦で、醍醐は強豪・木村政彦と当たった。力一杯木村に挑戦した一戦が思い出として残って



恩師 永岡秀一十段と醍醐（昭和26年）

いるという。

そういった中で、醍醐の柔道への情熱は一層激しいものとなり、柔道に専念したいと強く思うようになっていた。そんな折、醍醐のもとに三重県警察より勧誘があった。その進退を恩師の大滝忠夫八段に相談すると、「東京へ帰ってこい」との有り難い言葉と共に、講道館研修員とし

ての職を用意して醍醐を迎え入れてくれた。

講道館研修員とは、醍醐と大澤慶己十段のみが持っていた肩書きである。講道館道場での指導が主な業務であるが、醍醐にとっては、仕事自体が全日本柔道選手権を目指しての稽古となっていた。この頃の講道館は、稽古の時間ともなると、各大

学から大道場を埋め尽すほどの学生たちがかけつけ、大澤と2人で2時間ほど休む間もなく道場に立ち続けて稽古をした、と醍醐は述懐している。

講道館に勤務するようになってからは、毎日午前中は警視庁におい

て、常勤の教師や師範と行動を共にしながら稽古に参加している。昭和25（1950）年、醍醐は、警視庁入りを勧められたが、講道館を主体に活動したい意向を持っていたので、これを辞退している。すると、「体育事務を嘱託する」との発令を受けることとなった。

昭和28（1953）年1月、醍醐に「研修員主任を命ずる」との辞令が出され、同時に「研修生」制度が新設された。この制度は、将来の柔道界を担う人材を育成するために設けられたもので、醍醐・大澤はその育成にあたる重要な任務を担った。

この研修生には、各大学の優秀な選手、来日している外国人修行者なども含まれていた。毎週土曜日には嘉納履正館長の講義、各講師を委嘱して技・形の解説などの研修も行われている。また、毎年1回は各地に1泊旅行等を企画して親交を深め、有

意義な日々を過ごした。

また別に「特別研修生」制度も設けられ、黒住大和（明治大学）と山岸均（東洋大学）が指名されている。講道館には寮などの設備が無かったため、醍醐が自らの家庭に預かり、寝食を共にしながら、お互いに柔道の修行に没頭した。

これらの制度は、昭和35（1960）年頃まで続いた。研修生として講道館で修行に励んだ者たちは、その後、警察・大学・実業団等それぞれの分野で活躍し、講道館柔道を支える存在となっている。

全日本柔道選手権大会初優勝

昭和24（1949）年1月に23歳という若さで六段に昇段した醍醐は、研修員として講道館に軸足を置きながら、国民体育大会や東西対抗戦など全国のような大会に出場し勝利を収めており、「醍醐強し」の名

声を高めていった。しかし、柔道日本一を決する全日本柔道選手権では勝ちに恵まれず、昭和24年25（1950）年とも3位に甘んじていた。柔道家になったからには日本一を獲りたい、そんな思いで、体調も万全に満を持して臨んだ昭和26（1951）年の全日本選手権、醍醐は準々決勝で松本安市を、準決勝では羽鳥輝久を破り、順当に決勝まで駒を進めることとなった。そして大豪・吉松義彦との決勝戦となる。試合の様子は以下に詳しい。

吉松は一昨年（昭和24年）の選手権大会では二分を出でず醍醐に負けている。雪辱戦でもあれば、日本一の覇権をとるかとのめり大きな試合だ。互に礼を交して右の自然体に組む。吉松、自重して右の内股にゆく、醍醐、よく防ぐ。更に内股にゆく、醍醐の体、やや泳ぐ、吉松、またしても内股にゆ

く。醍醐、これを引抱えて落さんとしたが成らず。今度は醍醐、右の内股にゆく、これも強い技であって妙技とは言われない。かけているのがハッキリ見えているのに吉松もこれを返すことが出来ない。醍醐、続けて左内股にゆく、返されはしないかと頗る不安、互に左右の内股で攻め合い、互に大切にとって斬れ技なし。吉松、三度の内股に醍醐は二度。若しここで判定したら吉松という処だったが、醍醐器用に身体を運び、内股の呼吸から小内刈りにゆく。吉松、これをもってわずかに不利。ここで吉松、一層自重すればよかったが少し焦り気味になって、場外から場内に立ち直った醍醐の堅実な姿勢に猛然と右大外刈の強転を浴びせた。これは吉松の不作で、醍醐それを見無意識に裏技に変化し軽く返して強く押せば審判「一本」

と宣した（12分48秒）。かく咄嗟に出る柔道の妙技こそ、平素練習の賜だ、吉松にして見れば実に惜しい試合だった。こうして白熱化した栄冠も恙なく終りを告げ、怒涛のような拍手の中に日本一の栄冠は醍醐敏郎選手の頭上に輝くこ



決勝戦、吉松に大外返で一本勝

とになった¹⁴。吉松の猛襲に押され気味であったが、そこで慌てず、醍醐は一気に小内刈に行き、技ありに近い技をとって吉松を追い込んだ。小内刈で相手の体勢を崩して大技に連絡する、醍醐の得意とするパターンのひとつである。そして吉松の焦りを誘い、大外刈を返して仕留めた¹⁵。醍醐の身



熱戦終わって表彰式での醍醐・吉松

体のキレは勿論、気魄で勝ち獲った日本一と言えるであろう。優勝を決めた醍醐は、ただ手放しに喜ぶばかりではなかった。嬉しい気持ちは勿論だが、この先チャンピオンの名に恥じない技術と体力を維持しなければ、と気持ちを引き締め、さらなる努力を誓ったという¹⁶。この向上心と、そのための不断的努力が、現在の醍醐十段を十段たらしめている素因ではないであらうか。

嘉納履正館長に随行し柔道使節として世界へ

昭和26（1951）年、フランス

柔道連盟ボネ・モリ会長からの招待があり、嘉納履正館長、田代重徳国際部長、松本芳三東京高等師範学校教授、醍醐のメンバーで11月28日から翌27（1952）年3月15日までの80余日の旅を過ごした¹⁷。訪れた国はフランス・オランダ・ベルギー・イギリス・スイス・西ドイツ・カナダ・アメリカの8カ国に及んだ。この使節団は、世界柔道連盟結成の準備と正しい講道館柔道の普及を目的としており、まだ25歳の年若い醍醐にとっては、全日本の覇者として柔道の真の技を理解させるための実働役という大役を担ったのである。そして、パリで開催された欧州柔道選手権大会において、醍醐は、初日にはフランスの選拔選手、2日目には欧州選手権に参加の選拔選手10人を相手にしての掛け試合を行い、いずれも華麗な技で満員の観客を大いに魅了した。また、訪れた各国で

も同様の掛け試合を行ったが、ロンドンのアルバートホールで開催された10人掛け試合では、互に整列して礼を交わした時には確かに10人だった筈だが、終わってみれば13人いたということもあったという。醍醐は、海外柔道界に日本柔道の強さを鮮烈に印象付けた。現地の新聞報道からも、その人気と熱狂ぶりを識ることができる。

全日本柔道選手権、2度目の優勝
昭和26年最初の全日本制覇以後における醍醐の戦績を一部紹介する。昭和27年の全日本では、吉松義彦に敗れて3位。同年11月、講道館創立70周年を記念して開催された全日本

の、異国での貴重な経験は、のちの醍醐にとって極めて大事なものとなっていた。



欧州選拔選手との10人掛け
10人目を跳腰に仕留める

イタリアでは、当時のローマ法王であるピオ12世との謁見が許されている。バチカンの法王の居室に招かれて握手を交わし、法王自身の像を鑄造したメダルを頂いた時の感激を今でもよく覚えていっているという。こ

柔道年齢別選手権大会では20代の部で優勝。また、同じく27年に秋田市において催された第3回全日本柔道東西対抗大会では、醍醐は東軍三将として出場し、西軍の広瀬巖副将と伊藤徳治主将の強豪を屠り、東軍の副将大將を残して初優勝に貢献した。この活躍が評価され、最優秀選手賞を受賞している¹⁸。



2度目の全日本選手権優勝、天皇杯を手にする

翌昭和28（1953）年の全日本には、右手首の狭窄性腱鞘炎のため不出場となったが、その翌年、29（1954）年の全日本選手権において、醍醐は見事2度目の優勝に輝いた。

この全日本を予想する当時の新聞記事には、「吉松義彦の三連覇なるか」「醍醐・伊藤らの進出に期待」「醍醐・吉松の決勝か」「僅差で迫る伊藤

藤（秀）と中村」などの見出しが躍っている。試合では、吉松が準々決勝戦で柄本芳孝に判定負け、伊藤（秀）は戸高清光に背負投で敗退するなど波乱の展開となっていた。それに対し醍醐は、一回戦に山肩敏美、二回戦は石橋

彌一郎、準々決勝戦は橋元親をいずれも優勢勝で破り、準決勝では夏井昇吉を大外刈で一本勝に仕留め、いよいよ中村常男との決勝戦となる。

中村は武専柔道科出身七段（会社員）、醍醐は東京高師柔道科出身六段（講道館研修員）、どちらが日本一の覇権を占むるか、大会のもつ意義もこの一戦にある。

中村は身長、体重、醍醐より少し大きく五年の長。何れも角力の太閤にして見ほましい堂々たる体格だ。中村は右、醍醐も少し前にかかった右の姿勢。まず中村、内股に攻めれば醍醐も同じ内股で攻め返す。今度は醍醐、小内刈に行ったが利かず、更に内股に行く、徒労。同じ「技」で攻めつ、攻められつ、見るべき「技」もなかったが、十四、五分を経過したころ、中村は「右内股」が強いのに「左内股」をかけた。醍醐これを器用

に返して「技あり」となる。これで中村モウ「ダメ」だと観念したものの微笑すら浮かべて再び対す。醍醐、大いに自重す。それから二人の間に、小ぜり合いの「技」はあったが、中村にとって不利な「技」ばかりだった。稽古着姿の三船審判、眼光、更に光らして二人の態度を凝視したまま規定の「二十分」を経過して判定、醍醐の立派な「判定勝」。

かくして昭和二十九年度の覇権は昭和二十六年度の覇者六段、醍醐敏郎選手の手に戻した¹⁹。

醍醐は、2回目の全日本覇権を懸けたこの大会は、体力面の配分を考慮しながら慎重な試合を心がけていた、と後に語っている。

引退を決意するまで

昭和30（1955）年の全日本選手権大会、醍醐は、警視庁での稽古

で右膝の靱帯を負傷して欠場せざるを得なかった。そして翌31（1956）年、いよいよ開催される第1回世界柔道選手権大会に向けて、日本代表の決定を懸けた大会を迎える。

醍醐こそ最有力候補との期待がかかる大会であったが、準決勝戦で夏井昇吉と対戦して敗れ、記念すべき世界大会への出場は果せなかった²⁰。

醍醐は動く柔道である。動いて自分のリズムに相手を引き込み、「作って」「掛ける」試合展開が醍醐柔道の持ち味である。これまで夏井とは何度も対戦し、自分の柔道をしてきたのだが、この試合では、醍醐の動きが反対に夏井のリズムに転化されるという、醍醐自身の対応の甘さがあったことが敗因であり、夏井の成長を裏付ける試合であった、と醍醐はこの一戦を省みている。

30歳にして七段へと昇段を果たした醍醐であったが、明けて昭和32（1

957）年、全日本選手権に出場を決める東京都選手権の三回戦で早大の三宅倫三を右大外刈一本で破ったものの、軸足の左膝靱帯を負傷して本大会出場の権利を放棄せざるを得ないという、大変深刻な事態となる。

そして、未だ完治していない怪我の不安を抱えての出場となった翌33（1958）年の全日本では、醍醐は、一回戦古賀正射^{まさみ}と対戦するが、僅差判定にて敗れる結果となった²¹。醍醐は、満32歳という年齢からの体力的な限界、また負傷による活力の減退を感じ、遂に選手生活の幕を引く決意を固めた。昭和24年から33年までの10年間、醍醐は、全日本柔道選手権覇者を目指し、たび重なる負傷に悩まされていたものの、多くの支援者応援者に支えられて闘った。醍醐は、この支えがあったからこそ、挫けることなく闘い抜くことができた、とても充実した選手時代であっ

た、と振り返っている。

強化コーチとして

昭和35（1960）年、東京オリンピック大会に柔道競技が正式種目として採用されることが決まり、全柔連では昭和36（1961）年2月にオリンピックに関する委員会が設置される²²。この中で、醍醐敏郎、大澤慶己、山舗公義の3名がコーチに指名され、さらに日本体育協会からも4月1日付で「柔道競技の強化コーチを嘱託する」との辞令が出された。そして、全柔連としては初めて、全国から推薦された選手を集めて、第1回強化合宿を行うこととなった。これが、醍醐にとって、昭和63（1988）年まで28年間の永きに亘って選手強化に携わる第一歩となるのである。

醍醐は、モントリオールオリンピック、ロサンゼルスオリンピックで

は監督を務め、昭和54（1979）年からは広瀬巖委員長の後を引き継いで平成元（1989）年3月まで10年間強化委員長としてその重責を担ってきた。在任中の世界選手権大会・オリンピック大会では必ず半数以上の金メダルを獲得してきたが、最後の任期であるソウルオリンピックでは、1個のみ²³という惨敗に終わっている。オリンピックの翌年3月、醍醐は強化委員長の任期を終えるに至った。

醍醐は、全柔連からの指名を受けて昭和52（1977）年に日本体育協会評議員に就任している。その後、体協から推薦され昭和54（1979）年より昭和60（1985）年3月までの

間理事に就任、さらに、競技力向上委員にも選ばれて活動を行った。



ロサンゼルスオリンピック閉会式にて
右から醍醐、斉藤仁、細川伸二、野瀬清喜、松岡義之

過日のロンドンオリンピックでも日本柔道は大変厳しい状況であるが、何時の日か再建を期待したい。30年近くに亘って重責を果たしてきた醍醐は、現在の日本柔道への期待をそう述べている。

警視庁・警察大学校での職務

昭和25（1950）年に警視庁の嘱託となった経緯もあったが、昭和37（1962）年6月当時の原文兵衛警視総監²⁴より警視庁技術吏員・柔道副主席師範を拝命した。

警視庁では、主に選手の強化を担当した。講道館研修員の職は辞したが、時間的に余裕があったので、醍醐は毎日指導員として講道館でも指導している。そして、昭和56（1981）年に講道館に新たに道場指導本部が創部された際、部長の小谷澄之十段の補助として副部長に就任した。また醍醐はこの間、昭和44（1

969）年には八段に列せられている。

昭和41（1966）年、警察大学校に新たに「柔剣道指導者養成科」が設けられることになった。これは、警察官は柔道・剣道が必修であるので、その指導者を養成するためのコースである。醍醐は、請われて警視庁技官・警察大学校教授として、術科教養部に勤務することになった。養成科コースは、全国県警察本部から推薦された柔道担当者が対象であった。就学期間は1カ年であり²⁴、後に柔道剣道の他に逮捕術と体育コースも加えられ、「術科指導者養成科」と改称されている。学生は、選手時代に活躍した人たちばかりの顔見知りであり、和気藹々とした楽しい学校生活であったという。

この頃、国際交流基金より、海外への柔道指導者派遣要請が講道館にあった。醍醐は派遣者選定に携わっ

たが、2年に及ぶ長期派遣のため、人選には困難を極めたという。醍醐は、警察庁と折衝をし、同意を得て各国に指導者を派遣した。特に、アフリカのセネガル国には、12年に亘り6名の指導者を連続して派遣している。各国では、指導者らが献身的な活動を行い、大きな成果があったと高く評価された。また派遣の責任上、醍醐自身も派遣を要請している国々の事前視察や既に派遣している国での指導員の生活環境・指導状況を把握するため、アフリカ6カ国に国際交流基金から派遣されている²⁵。

昭和60（1985）年7月、醍醐は術科教養部長に昇任した。翌61（1986）年3月末に定年退職したが、ひきつづき非常勤講師として20年間、計40年間を醍醐は警察大学校で過ごしている。この期間を振り返って、醍醐は、40年間、警察大学校で

多くの人たちと絆を深めてきたことは、ひとつの大きな財産であると同時に、楽しい体験であった、と述べている。

講道館道場指導部長に就任

近來の乱取試合を見るにつけ、醍醐は、嘉納師範が創始した柔道とは異質のものになってきているという感を強くしている。柔道と言えば、今や一般にはオリンピック柔道競技に展開される競技が全てであると認識されているように思える。競技とは、メダルを獲ることが目的で、単に競技として勝負のみに拘泥して変質してしまっている。こういった柔道への憂慮を持って、昭和61（1986）年4月、醍醐は講道館の道場指導部長に就任することとなる。



講道館夏期講習会で、古式の形の指導に当たる醍醐

柔道は日本固有の伝統文化である。道場は稽古を通して嘉納師範の

遺訓を実践する場である。世界の柔道競技に惑わされることなく、講道館創始の原点回帰を心がけ、醍醐は、種々の課題に取り組み20年余り勤務を続けた。そして、長年に亘る指導者としての実績等を評価され、平成4（1992）年には66歳で九段への昇段を果している。

著作を世界に発信

醍醐は、正しい講道館柔道の普及を目指して、柔道に関する書籍を著している。『柔道教室』は大修館書店より昭和45（1970）年に出版され今では46版を重ね、後に中国語の海賊版が香港・台湾の2書店からも出された。また、『講道館柔道・投技』は、講道館機関誌『柔道』に平成2（1990）年5月より平成10（1998）年5月まで、64回に亘って投技67本の解説を連載し、更に加筆改訂を行って『講道館柔

道投技（上・中・下）』として本の友社より出版した。また、同書の英語版が平成17（2005）年に（株）講談社インターナショナルより発行された。さらに、平成21（2009）年にはドイツのディーター・ボルン出版社よりドイツ語版としても出版され、現在は同社によってフランス語版も準備されているという。こうして醍醐の柔道理論は、国内はもとより、世界各国の熱心な柔道家たちの座右の書となっている。

その他の活動

選手生活を終えてから、醍醐は東洋大学柔道部の部活動に参与したが、特に山岸均・前田行雄・加藤雅晴・松田邦孝らの育成には、若き指導者時代の良い思い出として残るほど身も心も彼らに注ぎ込んだ。また国士舘大学や、さらに日本電気（株）等企業の部活動の競技力向上に協力貢

献したことは、醍醐の貴重な柔道人生の1頁を物語るものであろう。

また、平成9（1997）年から長野県松本市において、醍醐敏郎杯少年柔道錬成大会を毎年開催している。醍醐は、この大会を通して少年柔道の将来への飛躍に寄与できることを願っているという。その想いを受けて、多くの少年が全国各地から参加し、醍醐敏郎杯は盛大に挙行されている。

「古式の形」研修会

平成18（2006）年1月8日、醍醐は栄えある講道館十段へと昇段を果した。80歳となっていた。十段は、長い歴史のなかで12人にしか許されていない誉望ある段位である。その十段昇段という栄誉に浴し、醍醐は、柔道人生の一つの区切りを迎えたと感じたが、また同時に、これが生涯柔道を目指す、新たな出発点

であるとも自覚したという。

醍醐は現在、古式の形研修会を開催し、その活動に没頭している。この会は、醍醐個人の研修会で、「口伝でんかん会」と称している。世話人がいるだけで会則もなく、誰もが自由に参加でき、また辞めることもできる。15年程前に5名で始めたものが、現在では30名程にもなり、毎週月・木の2回、講道館で研修を行い、甲冑を着用した攻防の理合いの解明に励んでいるという。

これまでは柔道界の多くの人たちと交流し、楽しく、充実した柔道人生を送ってきた醍醐であるが、現在は、全ての役職から解き放たれて、柔道そのものに生き、この研修会に参加する柔道家たちと交流し絆を深める日々を過ごしている。87歳、十段醍醐敏郎は「黙々と我が道を行く」の心境で、今日も道場に立ち続けている。

*引用文献は、現代漢字に改めた。

《主要参考文献》

- 「新十段の横顔」『柔道』第77巻第3号
(平成18年3月)
- 「訪問インタビュー 私の人生賛歌」
『ひまわり倶楽部』(株)ちばぎん総合研究
所発行(平成22年10月)
- 《その他典拠・註》
- 1 現在の館山市
- 2 本当は前年大正14年の12月26日に生
まれたが、年末の慌ただしさ等から出
生の届が年明け2日になった。
- 3 「捕鯨の話」厚海熊太郎著『千葉県立
安房博物館報』第12号(昭和51年)
- 4 房州洋^{ぼうしゅう}という四股名で幕下力士とし
て活躍したが、家庭の都合で鬻^うを切り、
安房中柔道部の助手として後進の指導
に当たった。その後、同門の天竜らと
渡満し、満州国民政部武道課長・武道
主事等を歴任。
- 5 「柔道部記事」『校友会誌』第36号
千葉県立安房中学校校友会発行(昭和
15年)
- 6 大阪毎日新聞主催。大阪府堺市大浜
で開催された。
- 7 「相撲部記事」『校友会誌』第36号
千葉県立安房中学校校友会発行(昭和
15年)
- 8 「サライ・インタビュー」『サライ』
平成17年4月5日号
- 9 柔道専攻
- 10 「座談会「高師柔道」を語る」『東京
高等師範学校柔道部史』
- 11 現在の静岡県静岡市
- 12 「講道館秋季紅白試合記」『柔道』第
15巻第11・12号(昭和19年)
- 13 「第2回新生柔道大会」『西日本新聞
社』(昭和23年)
- 14 「全日本柔道選手権大会実況」『柔道』
第22巻第6号(昭和26年)
- 15 「醍醐六段の優勝をよろこぶ」工藤
一三著『柔道』第22巻第6号(昭和26年)
- 16 「歴代王者に聞く」『激闘の轍』講道
館全日本柔道連盟発行(平成21年)
- 17 「柔道使節帰朝記事」『柔道』第23巻
第4号(昭和27年)
- 18 「第三回東西柔道対抗試合の記」『柔
道』第23巻第11号(昭和27年)
- 19 「全日本選手権大会特集」丸山三造著
『柔道』第25巻第6号(昭和29年)
- 20 「日本代表、吉松と夏井」『朝日新聞』
昭和31年5月4日
- 21 「全日本選手権大会」『柔道』第29巻
第6号(昭和33年)
- 22 「柔道のオリンピック対策進む」『柔
道』第32巻第3号(昭和36年)
- 23 当時は男子のみの開催。
- 24 柔道八段
- 25 第七代東京都柔道連盟会長
後に9ヵ月更に半年に短縮された。
- 26 「国際交流基金柔道指導者報告書」醍
醐敏郎著(昭和52年)

《写真典拠》 全て醍醐敏郎氏所蔵

